

書評 押山美知子著

『少女マンガ ジェンダー表象論』

男装の少女 の造形とアイデンティティ

信時 哲郎

「博士論文書誌データベース」(<http://db.rin.ac.jp>)で調べてみたところ、近年、マンガで博士論文を書く人が増えているようだが、日本文学専攻者は必ずしも多くなかった。本書は平成十八年に専修大学に提出された博士論文の成果で、管見の限り日本で最初に公刊された日本文学専攻者によるマンガの博士論文のようである。今更、日本文学専攻のセクトに拠ろうというつもりはないのだが、日頃から日本文学の一分野としてのマンガに、もっと注目すべきだと思っている者の一人として、まずはこの快挙を喜びたいと思う。

本書は少女マンガに表れる 男装の少女 を視点に、少女マンガのジェンダー表象がどのようになされ、どのように変容していったかを分析するものである。

第一章の「男装の少女 キャラクターの出発点」では、日本初の少女向けストーリーマンガと言われる「リボンの騎士」を取り上げる。

男装の少女 であるサファイアのまつ毛は長くて本数も多く、縦長の眼、細い眉、大きなリボン、暖色系の服装… と、女性性を表象するものをまとっている。「女の心」が奪われると、こうした女性性の表象は捨てられるが、性別の越境は表面的で、知力といった内面を問われる段になると、非力な存在として描かれるのみであることが指摘される。そして「サファイアの 性別越境」は、ヒロインの主体性獲得のための実験的な試みなどではなく、むしろ既存のジェンダー・カテゴリーを補完する役割を果たす、「越境」とはほど遠いもの”であるという。

第二章の「『傍流』としての 男装の少女」では、「リボンの騎士」の後、男装の少女 ものは停滞し、ジェンダー表象は保守化するが、水野英子の『銀の花びら』は、「自らの意志と力で運命を切り開こうとする、既成のイメージから乖離する“少女”像を提示し続けた」とされる。

第三章の「男装の少女 の成長」は、二四年組 を代表する萩尾望都の「雪の子」の分析から始まる。これは 男装の少女 であるエミールが成長し、女性の肉体を獲得する前に自殺を決意する物語、つまり女性のジェンダー・カテゴリーに組み込まれることを永遠に拒否する少

女の物語であるという。

一九七二年に連載が始まった『ベルサイユのばら』は、男装の少女にして近衛兵であるオスカルが、だんだんと平民に接近し、遂には貴族であることも放棄して、革命の最中に命を落とす物語だが、オスカルは男性ジェンダーに分類されていた知性を獲得しているだけでなく、眼や唇、眉、髪… のすべてが中性的に描かれ、アンドレと契るシーンでも、常に命令口調であるなど、既存のジェンダー・カテゴリーに留まっていけない。そして「オスカルの登場によってようやく男性性、女性性双方を併せ持ち、既存のジェンダー・カテゴリーの枠組みに囚われず、性別越境 を指向し続ける自律性と主体性を伴った存在として自己を確立するに至った」と著者は書く。

第四章の「男装の少女 の反復と再構築」では、オスカルの登場以降、男装の少女 は、すでに古典的少女マンガの典型と見なされてしまったためか数は少ないとしながらも、森川久美の『ヴァレンチノ・シリーズ』では、オスカルを更に一歩進めたジェンダー表象が描かれていると指摘する。

八〇年代に入ると、男装のヒロインに「自分を女だと思ったことは生まれてこのかた一度もなかった」(『パロスの剣』)と語らせたり、木原敏江の『とりかえばや異聞』のように、身体的女性性と 内面的 男性性が合致しているヒロインも描かれるが、著者は九〇年代に描かれた、さいとうちほ・ピーパパス(原作)による『少女革命ウテナ』を以て男装の少女 ものの集大成であるとする。

ウテナは男装しているとは言え、ピンクの学ラン、長いまつ毛、ピンクの髪… といったように女性性の表象記号を身にまとうて描かれるが、ウテナは 内面的 女性性に安住することを拒み、「男でも女でも強さと気高さを失わない人間」を目指して生きることを決意する。

本書で展開される論には教えられる点が多かったが、分析が細部にまで及んでいるためか、本論の「流れ」とは異なった傾向まで拾ってしまい、結論の方が先行しているように感じた箇所もいくつかあった。尤もこれは必ずしも著者の責任ではなく、言葉の分析と図版の分析を並行させるマンガ研究が負っている困難なのではないかとも思う。マンガは読者アンケートや編集者・出版社の意向等で、作者の意図や物語内の論理までが無視される場合があるが、これも研究を細かくすればするほど矛盾として表れ、研究する側にとっては障壁となるのではないかと思った。が、もっと気になったのは分析の最後にあった「少女”や”女性”

なるものへの違和感から自分とは何かを問い続け、男女非対称のジェンダー・カテゴリーを相対化し、脱構築する、男性性と女性性双方を内面化した、自律的かつ主体的存在として自己確立を果たすタイプの男装の少女を描いた作品は、『少女革命ウテナ』以降、管見の限りではあまり描かれていない」という正直すぎるコメントである。著者はさらに「既存のジェンダー・カテゴリーの枠組内で規程のジェンダー・コードの部分なやり取りに終始する、言わばサブファイヤ・タイプの性別越境を描いた 男装の少女 ものが増えているように見受けられる」と続け、こんなことを繰り返しているだけでは「少女マンガのジャンルとしての形骸化とそれに伴う衰退は必定であるようにも思われる」と少女マンガの終わりを匂わせて筆を置いている。

つまり『少女革命ウテナ』は盲腸的な存在で、他は『リボンの騎士』の段階に後退してしまっているというのである。だから少女マンガは滅びるといえるのだが、ここで問われなければならないのは、少女マンガの終焉ではなく、男装の少女を視점에ジェンダー表象の変容を辿ろうとした本書の方法についてではないだろうか。

既存のジェンダー・カテゴリーを問い直すようなものが少女マンガなのだという著者の定義は、今なお「少女らしい幸せ」を志向する少女マンガが多いことからして、あまりにも狭義でありすぎると思うが、少女マンガに既存のジェンダー・カテゴリーを問い直そうという強い流れがあるのは確かだと思ふ。

ではなぜ『少女革命ウテナ』までは順を追って変容の過程を追うことができたジェンダー表象が、急に先祖返りしてしまったのかと言えば、著者がジェンダー表象の変化を追ううちに、「男らしい装い」というジェンダー・カテゴリーに、逆に囚われてしまったからではないかと思う。

つまり、ジェンダー・カテゴリーが問い直されてきた結果、少女たちは男らしいとされている（いた）行動をとるにしても、わざわざ男装する必要がなくなつたのではないかと思うのである（ただ「風光る」のような歴史物や、あるいはメガネっ娘やツンデレと同じようなキャラクター属性の一つとして、男装の少女は今後も描かれ続けるとは思ふ）。

例えば、本書で扱っているような 男装の少女 は、男装によって初めて「戦い」という男性ジェンダーに属する行動を取るようになっていたと思うのだが、男装などしなくても戦いの世界に身を置く少女は、『エースをねらえ！』の岡ひろみ、『スケバン刑事』の麻宮サキ、『美少女戦

士セーラムーン』の月野うさぎ、宮崎アニメの多くの少女たち……と、たくさん例が挙げられる。こうした「戦闘美少女」（斎藤環）たちも対象に含めてジェンダー表象を扱っていったら、著者が指摘するような「流れ」が途絶えていないことは十分に確認できたと思うし、少女マンガの終わりを持ち出さなくても済んだと思うのである（少年マンガにおける「戦闘美少女」を分析したら、全く逆の結論が導き出されるかもしれない）。

また、やおいマンガ（男性同士の同性愛をテーマにしたマンガで、その源流には七〇年代の萩尾望都や竹宮恵子がいるとされ、現在、商業誌や同人誌で空前の人気を保っている）は、少女たちが男を装うレベルに留まらず、ついにセックスの壁まで越境してしまったものだと思えることもできると思う。西村マリは、やおいマンガについて、「女性を支配すべき男性が、性という支配のドラマで、挿入される側という女性の役割、すなわち支配される側にあることは、男性の支配者としての自己像を決定的に傷つけてしまふ」と書き、「男を犯す！ ヤオイの魅力とはこれに尽きる」（『アニパロとヤオイ』・二〇〇二）とまで書いている。

既存のジェンダー・カテゴリーに対して、これほど強く違和感を訴えるマンガは、かつてなかったように思うのだがどうだろうか。

ないものねだりついでに記しておけば、少女マンガとジェンダーの周辺には、男性名を名乗る女性マンガ家（荒川弘や峰倉かずや、鈴木次郎など）の増加、少年マンガ誌に熱中する女性の増加等々の興味ある現象が起こっているが、こうしたことについては今後の研究を待つことにしたい。いずれにせよ、マンガは単行本に収録する際に修正される場合も多く、手塚治虫の『ジャングル大帝』のように本に収録される度に大幅に描き換えられた例もある。しかし一般の図書館にマンガが収蔵されることは稀で、まして初出雑誌を収蔵している場合は皆無に等しい。おまけに論文を発表するに際しても、図版の引用に手間がかかるだけでなく、『マンガの社会学』（二〇〇一）の執筆者の一人は、論文に図版の引用が許されなかったばかりか、論旨に納得がいかないとして、当該作品に関する言及をすべて削除させられたという。こうした困難を乗り越えて、資料の収集と分析、そして論文執筆から刊行にこぎ着けた著者の研究活動には、今後とも大いに期待したいと思う。